

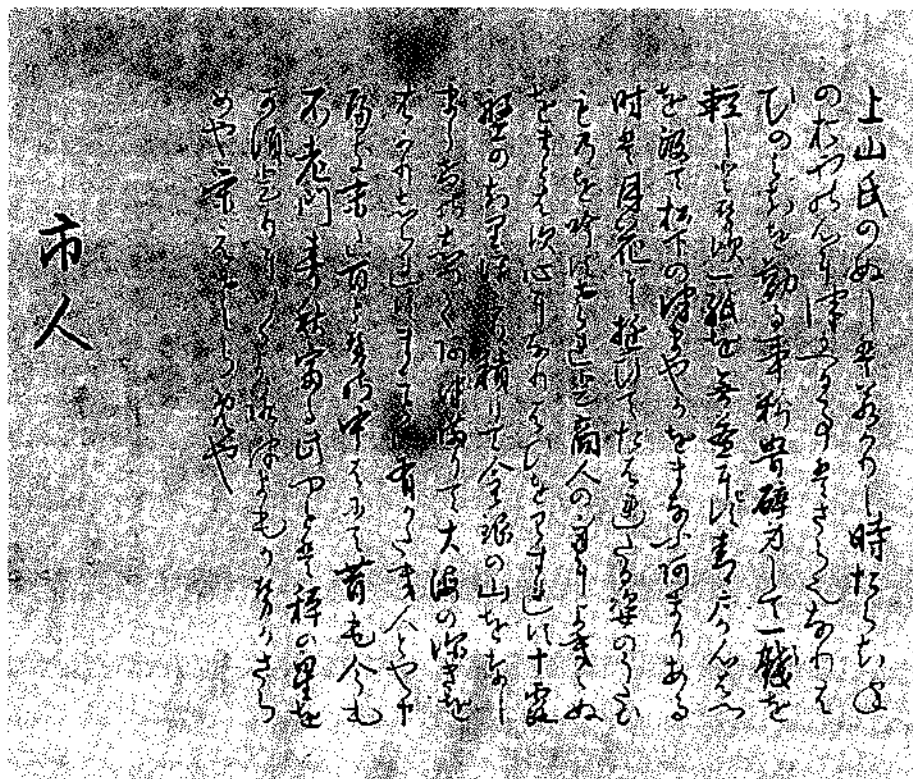
新収品紹介

葛飾北斎筆「上山喜兵衛像」

本図は絹本着色、縦九四・七糎、横三一・五糎で、上部に浅草庵市人の像主が描かれる。像主は薄い藍色の着物に朽葉色の紋付を羽織り、あくらをかいて赤い座蒲団に座り、左手で算盤らしきものを立てて支えとしている。像主の前には「享和三亥年／閏正月吉祥日」の年記のある金銀出入帳と、貨幣交換用の厘秤が置かれ、像主の商売を暗示している（挿図3）。そして画面右下に「画狂人／北斎画」の款記と「龜毛蛇足」朱文長方印があり（挿図4）、葛飾北斎の描いた肖像画と知られる。享和三年（一八〇三）といえば北斎四四歳にあたり、享和年間の制作とされる「二美人図」（重文・MOA美術館）の款記や印と同一と認められるので、北斎真筆としてよい。

浅草庵の賛によれば、像主は上山氏といい一銭一紙を無駄にせぬ儉約家の商人で財をなしたが、質素な着物を身につけていたという。賛者の浅草庵市人は江戸後期の狂歌人で、本姓大垣氏、名を久右衛門といい、江戸浅草東仲町で質屋を営んだ。狂歌を四方赤良（大田南畝）に学び、盟友頭の光没後は壺側を興し、蔦屋などから狂歌本を出版している。

この壺側一門を中心とした狂歌摺物で、北斎が挿絵を描き、享和四年正月の刊行かと思われる『春興五十三駄之内』（すみだ北斎美術館）の「藤枝」に一丁亭羽狩の「染飯にこがねの色もかそへつ、一包買ふ春の家つ



安村 敏信

挿図1 浅草庵市人の賛